

玉碎

先生

死ンデ下サイ

文学ノタメニ

私モ

死ニマス

大イナル戦争ノタメニ

1

(三田循司・太宰治宛の手紙)

戸石泰一

三田循司は、一九四三年五月、アッツ島に於て戦死した。

彼は、私の一級上、仙台の高等学校で知りあつたのである。あの頃、私達はよく「純粹」という言葉を口に、それが凡てを律する規範であつたのだが、私にとつて、三田は、「純粹」の同義語（シノニム）のような男であつた。

鉢のひらいたいがぐり頭、ややずり落ち気味の鉄ぶち眼鏡の底に光る彼の大きな眼にあらうと、私はいつも自分の軽薄さを思い知らされる氣になつた。

戦争が始まつたのは、三田が大学三年の十二月である。三田たちのクラスは修業年限が短縮され、その十二月に繰り上げ卒業ということになつていたが、卒業と同時に臨時徴兵検査があり、殆んど全員徴集されるだろうということであつた。

最後の口述試験が終つて、私達は行きつけの、本郷通り「藤村」の横を入つたところにある「シスター」という店で、三田の送別会をした。

「賀茂真淵つて、どんな本書いたんだ？」

「何だ、そいつを聞かれたのか、何て答えたんだい？」

「黙つてた。そしたら、社会にお出になつたらお困りになりますよ。よく御勉強下さいって云われた」

「社会にお出になつたら」という教授の感覚と、ムツツリおし黙つた云わば「朴実純粹」な三田との対比の場面が、むしろよきにおかしく、ゲラゲラ笑いだすと、三田

も、しかたなさそうに、ニヤリとしていた。店の女の子の音頭で、三田の好きな「青い背広で、心も軽く」という歌を、くりかえし合唱した。

「いいなあ、もう一度」

その度に、三田は感にたえたような声をだした。

「とにかく頑張ろうよ。また東京に集つて飲むさ」

口々にそんなことを云い合いながら、上野駅の改札口で別れた。

見送り人は、そこから中に入れないことになつてた。プラットホームの中頃で、三田はこちらをふりかえると

「おーい、頑張れようッ」

と、のぶとい声をはりあげてよこした。

「おーい、頑張れ」

手をふつて応ずると、三田は、もう一度、

「おーい」

と、ポストンバックをふりまわしていた。

アリュエーション作戦は、ミッドウェイ攻略の支作戦として、一九四二年六月、海軍第五艦隊司令長官（中将細

萱成一郎)指揮の下に行われた。

独立歩兵第三百一大隊を基幹とする陸軍北海支隊は、六月七日、殆んど何の抵抗をうけることもなく、アッツ、キスカの両島に上陸したが、しかし、大局的にみて、この成功は成功と云い難かつた。と云うのは、それは、この方面に敵艦隊を牽制誘致すると云う本来の作戦任務に失敗することによつて、かちえた成功だつたからである。そのため、主作戦ミッドウェイ方面に於ては、三、四の両日にわたる海戦の結果、みじめな敗北を喫して、作戦意図を中止せざるを得なかつた。

元来、ミッドウェイ攻略を決意させた意図というものが、その年の四月、東京にうけた爆撃を、海軍の面子の問題と感じ、「皇居の安泰」のためにも是が非でもという、凡そ非理性的な愚かなものに出発している以上、それもまた当然の結果であつたかもしれない。

だが、それにしても、ミッドウェイ敗北は、アリユンシャン攻略の意義を過大にさせねばならなかつた。大本営は、「攻略後、冬季以前ニソノ守備ヲ撤去セシムル」予定であつたのを、「全般ノ情勢上」急に変更し、北海支隊を大本営直轄として、海軍と協同し、アッツ・キスカ要地の確保に当るよう、命じたのである。

アッツは熱田島、キスカは鳴神島と、それぞれ改名さ

れた。

3

徴兵検査の結果、三田は第二乙種であつたが、学生兵は現役兵と同様の取扱いで、二月一日盛岡の歩兵第百五連隊に入営させられていた。

兵營で書いた三田の日記が遺つている。黒クロス装の懐中手帳、一冊書終えると、彼は、それを面会に行つた弟に、そつと手渡した。

〈言葉がほしい

言葉がほしい

言葉を失つてゆく〉

〈人間的感情は何物でもないのだ

(だがこの精神はよくない)

〈弱い葦だ

葦すぎるから弱いのか、

しかし 煉獄は信じなければならぬ

神から、眼をそらすな〉

（走狗とは苦しい。むしろ木石でありたい）

とあるすぐ次に、（うちひしがれた弱音をつぶやくでない。——汝断食する時悲しき面持すな）と書いているところもある。

これを書いている時の三田の表情がわかるようだ。けれども、ああいう云わばストイックでさえある三田の風貌は、軍隊ではうけいれられなかつた筈だ。何よりまず「要領」ということをおぼえ、阿諛の姿勢を身につけねばならない。三田は、当然、無能な劣等兵であつたに違いない。

三田はくりかえし「一兵となる」決意を書いている。学生兵の幹部候補生受験は既定の事実であり、拒否することなど思いもよらなかつた。却つて、特別に召集され教育される恩恵について訓示された。そのために、特に一時間の「延燈」が許可されて、消燈後学生兵は、火の気のない中隊講堂で勉強しなければならなかつた。

幹部候補生試験に落第した学生兵の補充兵は召集解除されると云う噂は、私達の時もあつた。三田も、或いはそれを期待したのかもしれない。だが、何れにしても、折角の親心を無にし、そんな馬鹿げた決意をしている三田が、ますます無能な劣等兵とされたことだけは確かだ。

ある。

三田は、当然、落第した。

合格者は、即日進級して、襟に幹部候補生のしるし、星の座金をつける。不合格者は、「落ち幹」と称し、軽侮のまとなる。短期間に幹部となつて、下士官に君臨する幹候への反感が、逆に「落ち幹」に集中されてくるのである。

三田は、所属の中隊をかえられた。もとの中隊において、ひけめを感じさせまいがための親心というものであろう。だが、気心を知るにつれ、一人ぐらひは庇護してくれる古年兵もできているものだ。息抜きの場所も自然に見つかる。それを、今度は、はじめから、またやり直さなければならぬ。各中隊にはそれぞれの個性があり、しきたりがまるで違ふのである。排他的であればあるほど「中隊の団結」は鞏固だということになつていく。一期教育はすでに終了したのであるから、しきたりの一々をいまさら教えてはくれないし、知らぬということは許されない。同じ初年兵でも、その隊に関する限りは、古参兵なのである。（詩人萩原朔太郎死す）に続いて（詩人佐藤惣之助死す）と、大きな字で頁一ぱいに書いてあるところもある。

八月八日一四〇〇、アッツ島は、戦艦航母巡洋艦駆逐艦各一からなる敵機動部隊の砲撃をうけた。アリユーション奪回の企図はようやく露骨であつた。これもまた、米軍にとつては、その領土内に上陸されたという面子の問題であらうか。一にぎりほどの北海支隊をそのままにしておいても、北方作戦の全局には殆んど影響ない筈であつた。

八月中旬、如何なる理由に基くものであつたかわからないが、軍は敵反攻の重点をキスカと判断し、アッツ守備部隊を撤収、キスカに移動させた。携行できぬ資材、糧秣は焼却させたのである。

しかし、九月三日、キスカ宿営地に対する敵機の宣伝ビラ撒布、十五日、B・29、P・38、39各二機による地上掃射をかわきりに、定期便のような空襲がはじまるに及んで、大本営はまた、作戦方針を変更した。

十月二十日、大本営は、北部軍司令官をして緊急処置として、北千島要塞歩兵隊の一部（歩兵隊長の指揮する一ヶ中隊半）を第五艦隊司令長官の指揮下に入れしめ、アッツ島の再確保を命じたのである。同二十二日には、独立歩兵二ヶ大隊半の増加による、北海守備隊の新設を

令した。

敵はすでにアダック島、クルック島に航空基地を推進し、西部アリユーションはその制圧下に、海上輸送は困難を極める状況にあつた。これに対し、北海守備隊は、その制空権奪回のために、築城防空冬営の諸施設を犠牲にしても、「一意飛行場を完成」すべき任務を与えられたのである。

北海守備隊に増加される兵力のうち、独立歩兵第三百三大隊の臨時編成は、盛岡の歩兵第五連隊長に命ぜられた。編成第一日が十月二十五日、完成日数は三日であつた。

「玉碎要員」という言葉があつた。

他隊への転属には、優秀な兵隊を出さないのが普通であつた。前線への転属、危険性が多ければ多いほどそうであつた。これによつて、何等かの意味での、もてあまし者を一掃しようとしているようであつた。だから、「落ち幹」の多くは、「玉碎要員」になつた。

三田は、十月二十六日、北海守備隊に転属を命ぜられ、三十日、あわただしく盛岡の駅を出発して行つた。

何もなく

何もなく

大空もなく

地上もなく

時間もなく――

その手帳の最後の頁に、千島の略図が書いてあり、「極北」と、濃く太く何度もなすり書きしている。

6

三田の所属していた独立歩兵第三百三大隊は、十一月三日、小樽から帝海丸に乗船、昭浦丸と船団を組んで、同七日、幌筵島柏原に着いた。

この部隊の任務は、新たにセミチ島に上陸、同島を確保して飛行場を作ることにあつた。十一月二十四日、軍艦阿武隈、木曾及び駆逐艦二隻の護衛で、モントリール丸、八幡丸の輸送船はセミチ島に向つたのだが、天候が意外に良く「現地到着当日、空襲ヲウケ攔坐炎上セシメラルル公算大」であるとの判断で、二十八日セミチ近海から引かえさねばならなかつた。幌筵に帰投したのは十二月二日である。

年があけて、一九四三年。正月早々から、北千島は大荒天であつた。海一面、無数にたつ三角波の頂きが、白いしぶきをとばして、突風が吹きまくつてくる。荒涼たる風景であつた。

一月六日、琴平丸は、アツツ島入港直前、敵潜水艦の攻撃をうけ、その消息を絶つた。

独立歩兵第三百三大隊は、セミチ攻略の任務をとかれ、アツツ島に向うことになつた。一月二十三日、崎戸丸、君川丸に分乗、幌筵を出港。時化はもう過ぎていたとはいえ、うねりはまだ高かつた。うねりの底につつこんで行くと、四囲はもりもりとムクレ上る灰色の壁であつた。波をかぶつて、うねりの頂上にでると、一瞬、あえぎあえぎしている僚船の煙突が、チラと見えた。それは同じところに止まり、まるで進んでいないようであつた。

昼とも夜ともつかぬ何日かが過ぎて、右舷に白く光る山が見えた。船は、その島のまわりをまわつて、北から切立つた崖にかこまれた深い入江に入つて行つた。入江の中はうそのように、静かであつた。大破して攔坐している船があつた。十一月二十七日、爆撃されたチェリボン丸だという。

アツツ島ホルツ湾入港、一月三十一日。

アッツ島は、いくつかの火山群と、砂地ツンドラ地帯からなる東西約四十マイルの島である。最も高い山は、ホルツ湾の南岸にある三千フィートの北鎮山であつた。その更に南には、熱田富士と名づけられた円錐形の山がある。しかし、高地は、ごろごろした岩ばかりの山であつた。

十二月から二月にかけては、暴風期であつた。時として、風速は四十米をこえ、その風は必ず雪、時には雨さえも伴なうのである。

しかし、灌木しかないこの島では、旧北海支隊撤収の時残していつた焼木杭や、流木を利用して、僅かばかりのお粗末な三角兵舎を作つたにすぎなかつた。アリユート人の民家や、天然の洞穴に居住できるものは、むしろ結構な身分であつた。大部分は天幕生活であつたのである。

勿論、諸資材は野積のままであつたから、時化の日、波に流出したこともあつた。

その荒天の日にあつても、敵機は来襲した。最も攻撃回数少なかつた一月でさえ、その延機数は六十九を数

える。

三田たちは、上陸すると直ぐ、自分の宿舎を作り、防空壕をほらねばならなかつた。

二月五日、北方軍の編成が下令され、北海守備隊は第五艦隊司令長官の指揮を離れて、北方軍（司令官中将樋口季一郎）の戦闘序列に入つた。同時に、北海守備隊は、増強されて、キスカ島部隊は北海守備第一地区隊、アッツ島部隊は、同第二地区隊と改編されることになつた。

一方、敵兵力は、年末以来七十隻以上の船団をもつて太平洋諸港から続々アリユーション方面に到着しつつあつた。

戦略上、さして重要だとは思われぬこの地点の情況は、お互いの「面子」という問題から出発して、もはやぬきさしのならぬ段階まで来てしまつていた。

二月十九日、アッツ島西浦沖に現われた巡洋艦二駆逐艦四は、午前八時から六時間ホルツ湾岸及びチチャゴフ高地に約千発の砲撃を行つた。守備隊は、戦死二、重傷一、軽傷二の死傷者をだした。